

# 出羽島の女性

## —就労形態を中心に—

佐藤里美

- I はじめに
- II 出羽島の漁業と通商圏
  - 1) 漁業の概略
  - 2) 出羽島近代漁業の経緯
  - 3) 出羽島の通商圏
- III 出羽島における第一次産業—海女を中心に
  - 1) 概要
  - 2) 海女漁の方法
  - 3) 海女の活動パターン
  - 4) 小括
- IV 出羽島における第二次産業—繊維工場を中心に—
  - 1) 昭和40年代
    - (a) 上野商店について
    - (b) 浅野商店について
  - 2) 平成 株式会社トータス—
  - 3) 小括
- V その他の女性労働
  - 1) 出羽島以外の就労
  - 2) その他の就労
- VI おわりに

### I はじめに

遠洋漁業の全盛期この島にはおよそ 1,000 人の居住者がいた。しかし筆者が目にした現在は 196 人、しかもその人々はみな高齢者であるという事実を突き付けられた。現状のままであれば人口は減少の一途をたどり、やがてこの島から人影が消えてしまうのも、遠い未来のことではないと危惧される（図 1）。

産業立地論からいえば立地条件に不利な離島は、他産業で若者を呼び戻すにも困難かもしれない。そうした現状をもって筆者は離島における生活の追体験だけでなく、出羽島に生きる人々の就労についての記述を試みることにした。特に本稿では、出羽島の基幹産業である漁業に女性たちがいかに関わってきたのかを、着眼点とした。漁業における女性労働は、雇用される企業が零細なことや、パートタイムが多いこと、また家族共同労働であることなどから、ややもすれば見過されがちである。しかし実際には、漁業労働に占める女性達の影響力は大きく、男子に比べて決して遜色はない。漁家の主婦はそのような生活環境で留守を守り、家計、家事は言うまでもなく、子供の教育、交際、その他全責任を負って支えているといっても過言ではなからう。

本稿では出羽島の女性における就労パターンを①海女、②繊維工場、③出羽島以外での就労、④家事のみ（漁の手伝い・引退・高齢など）の 4 つに分類し、とりわけ海女と繊維工場に重点を置きながら論じることにする。また離島という前提が出羽島の

通婚圏にどのような影響を与えてきたのかも着目する。その資料として 1980（昭和 55）年の調査結果と出羽小学校編（1982）を参考にした。

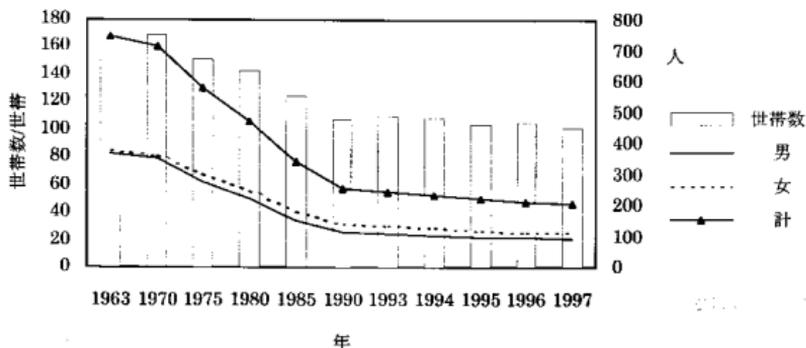


図1 男女別人口と世帯数の推移

注) 住民基本台帳より作成

## II 出羽島の漁業と通婚圏

### 1) 漁業の概略

牟岐町史編集委員会編（1976）によると出羽島の漁業の起源は寛政年間とされている。すなわち 1800（寛政 12）年に牟岐中村庄屋青木伊助が鞆浦御陣屋に召し出されて大島、出羽島への移住を催促された。移住者には船、網具等を貸し与えるほか、御口銀を牟岐浦の五分の一の半分の拾歩一とし、諸役を免ずるという好条件であったが、当時の事情からは移住者は現れず、青木伊助はやむなく五名の従者を引き連れて移住させた。この年に移住したのが現在にも姓を残す三守・鳥見・小松・青木・島田である。

大正・昭和初期の出羽島漁業については牟岐の一部としての出羽島ということではなく、阿波の出羽島として業界に名をはせた。すなわち、当時の徳島県下の大型カツオ・マグロ延縄漁船 13 隻のうち出羽島が 4 隻を所有していたことからわかる。このような出羽島漁業の経緯には 1914（大正 3）年に山村雪太郎所有の大正丸によって発見された阿波沓がある。この阿波沓発見を契機に出羽島は沿岸漁業中心から遠洋漁業中心へと移行していった。

出羽島漁民は地元だけでなく、神奈川県三崎、静岡県焼津、和歌山県勝浦方面への進出も活発であり、中でも寺島光太郎氏は日本一の漁労長といわれ、出羽島出身の船頭は 20 人を超す有り様であり、出羽島は完全に遠洋漁業の島として全国にその名を知られてきたのである。しかし、1939（昭和 14）年以降戦時色が深まるにつれて物資の不足、特に漁船の徴用と、漁船員の出征、さらに戦争末期の 1943（昭和 18）年以降は米軍艦載機による出羽島銃撃等、近海への出漁も思うに任せず、次第に衰退していった。漁船

も最盛時の大正末期から昭和初期にかけて 2 トン未満の漁船 150 隻、20~60 トンの動力漁船 12 隻が次第に減少し、終戦時には前者は 80 隻、後者は 0 隻になった。

戦後しばらくは牟岐浦と同様、漁獲物の組合への水揚げよりも、主食に乏しい島民の食糧生活を充足するため、主食の物々交換に漁獲物が使用され、統計としては全く信頼できない。戦後 20 年間の漁獲高は沿岸漁業の不振を表しているが、カツオ・マグロ漁業である遠洋漁業への進出がめざましく、戦時の好況から若者の従事者は急増し、約 200 人近くが神奈川県三崎、静岡県焼津、和歌山県勝浦へと出漁し、それぞれ船長・船頭・無船長・機関長・甲板長等、遠洋漁業の中心的存在であり、出羽島出身者は広く世界中に活躍した。

## 2) 出羽島近代漁業の経緯

産業分類別就業者数(図 2)から出羽島の基幹産業は漁業である。さらに水産業生産額(図 3)によると魚類の水揚げが最も多く、良質で知られている天草などの海草類、サザエ・アワビなどの貝類の順となっている。本稿の中では海藻類と貝類は海女の生産額と定義して論を進めていくことを確認しておきたい。

ここでは近代における出羽島漁業を時系列に追っていこう。まず、大正中期から昭和初期まで、カツオ漁が全盛期であった。水揚げされたカツオは阪神方面に出荷せず、出羽島で加工した。出島、島本など 4 つの加工工場があり、かつおぶし(土佐ぶし)を製造していた。工場の働き手は女性に委ねられていた。現在の船着場一帯がカツオの山で埋め尽くされていたというから驚きである。3 隻の船は 20~30 馬力のエンジンをつけ 15~6 トンで、乗組員はおよそ 30 人であった。漁法はイワシのまきえさ、竿釣り、漁期は春は 4、5、6 月、秋は 9、10 月が中心だった。このような漁法で一年間の水揚げは 3 万~5 万円ぐらいであった。主に出羽島と大島の周囲が漁場であった。

カツオ漁の休漁期間は、長さ 1.8m ぐらいの自家用船に 2、3 人で乗り込み延縄漁を行った。魚種は主にアマダイ・イトヨリなどの高価な赤物である。また冬場はブリやタイの一本釣りが行われていた。

1930(昭和 5)年頃になるとカツオ漁から魩延縄漁に切り替わった。それと時同じく現在の延縄漁も始まった。1935(昭和 10)年には船が大型化され、出羽島は当時の徳島県下では魩延縄漁の中心地で港の活気は想像に難くない。一航海で 3 千~4 千円の水揚げがあった。漁場も近海から遠くは 13 海里のところまでも漁に出かけることができた。また、船主組合が設置され、漁師間の規則などが明文化された。

以上のように活況を呈してきた漁業は、1939(昭和 14)年から下降線をたどってきた。その最大の原因は戦争である。若者の徴集はもとより、頼みの漁船さえも徴用され、1943(昭和 18)年には出漁していても敵機におそわれ、加工工場も自然につぶれてしまった。戦後しばらくして、出羽島漁業は遠洋漁業の活路を開き始めた。すなわち神奈川県三崎、静岡県焼津、和歌山県勝浦へ進出していった。出羽小学校編(1982)をもと

に作成した表 1 の出羽小学校卒業者昭和 20 年代の男性の移住先から、それらの様子をみてとることができる。また当時をしのぶエピソードとして、遠洋漁業船歓送の際は全校児童・職員が日の丸を手に波止場に集まり、校長先生発声の万歳三唱で見送ったという。

さて、現在の延縄漁が盛んになったのは船の大型化と動力化のほかに、化学繊維漁具の発達があった。漁具の進歩は目覚しく、それまで自分で作っていたのが店に行けばすぐに既製品を手にすることが延縄漁の一助となった。魚種は調査時の漁協水揚げ表によると、アマダイ・レンコダイ・イトヨリ・タイ・ガシラ・イサキ・ハス・アジ・イカ・タチウオ・カツオが出荷されていた。

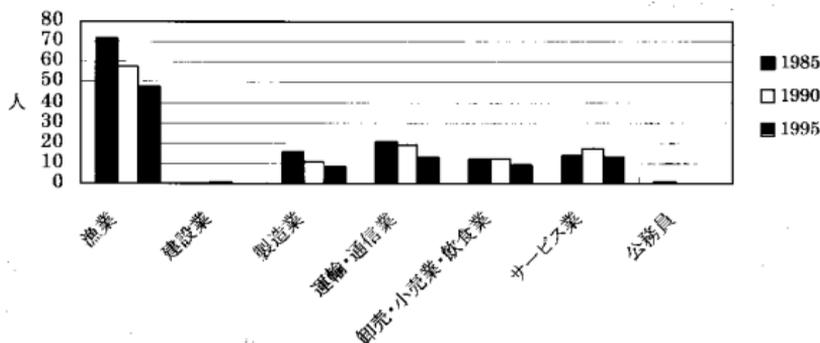


図2 産業分類別就業者数

注) 離島統計年報より作成

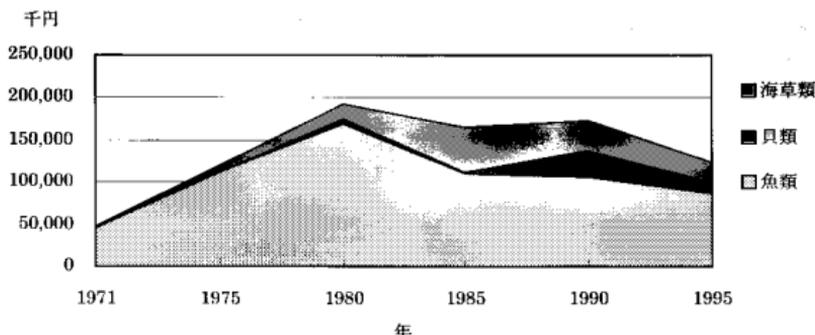


図3 水産業生産額の推移

注) 離島統計年報より作成

表1 出羽小学校卒業者男女別移住先

移住先／年代・性別	昭和10年代		昭和20年代		昭和30年代		昭和40年代		合計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
茨城県	0	0	0	0	0	2	0	0	2
栃木県	0	0	1	0	1	0	0	0	2
埼玉県	0	0	1	1	0	0	1	0	3
千葉県	0	0	0	1	0	0	0	0	1
東京都	1	0	0	1	5	0	1	0	8
神奈川県	1	3	7	8	3	2	2	1	27
富山県	0	0	1	0	0	0	0	0	1
石川県	0	0	0	1	0	0	0	0	1
長野県	0	0	0	0	0	1	0	0	1
岐阜県	0	0	0	0	0	1	0	0	1
静岡県	0	0	5	0	1	0	0	0	6
（内）筑西市・沼津			4	0	0	0			
愛知県	1	0	1	4	1	1	0	0	8
滋賀県	0	0	1	1	1	0	0	0	3
京都府	0	0	0	0	1	1	0	2	4
大阪府	2	3	2	21	11	23	18	21	101
兵庫県	1	2	4	9	5	9	5	4	39
和歌山県	1	0	1	1	5	3	0	1	12
（内）那智勝浦町	0	0	0	1	0	0	0	1	
岡山県	0	0	1	0	0	0	0	0	1
広島県	0	0	0	0	0	1	0	0	1
山口県	0	0	0	1	0	0	0	0	1
香川県	0	0	0	1	0	0	0	0	1
愛媛県	0	0	1	1	0	0	0	0	2
高知県	0	1	0	1	1	0	0	0	3
福岡県	0	1	0	2	0	0	0	0	3
長崎県	0	1	0	0	0	0	0	1	2
大分県	0	0	0	0	0	1	0	1	2
出羽島	5	6	27	18	6	6	22	12	112
出羽島を除く宇枝町	5	2	17	14	22	14	1	5	80
宇枝町を除く徳島県	6	2	28	14	21	14	10	18	113
合計			36	60	38	46	27	32	429

出羽小学校編（1982，pp.96～105.）

注）①各10ヶ年の合計数値であるが，用いた資料上，昭和10年代は昭和18年と19年の2ヶ年のみである。

②昭和18年～21年は高等科を含む。

## 3) 出羽島の通婚

出羽島では，田中と名乗るのが最も多く，野田，原田，堤とつづく（表2）。これは明治時代の移住から出身地の地名を名乗ったものだともいわれている。その後は，本家より分家してその姓を継いだものだろう。

かつては島内婚が多かった。それは交通・通信・産業の発展と深い関係があり，厳しい自然と離島という限られた対象の中から選ばれたため，やむをえなかったと思うが，同

族結婚もかなりの数あったようで、優生学の見地から考慮すべきことだった。島外との通婚は、交通の発達と共に、牟岐町本土が多くなった。太平洋戦争と戦局が厳しくなるにつれて、主食欠乏は農耕地の狭小なこの島にとって非常に深刻であったため、農村出身者との婚姻により双方が米穀と魚類等の食糧交流をはかった。そのため山河内地区からこの島へ嫁いだ人は多い。

表2 1980年現在の名字 上位5位

田中	18
野田	14
原田	9
堤	8
奥村	7
青木・川島・島田	6

注) 1980年調査報告より作成

戦後の混乱期を過ぎて、安定したこのごろでは教育の普及発達と交通産業の進歩により、また若者意識や職業も多様化し、島を出ていく若者が増すにつれて視野が広がっていったということは周知のことである。そこで、筆者は出羽島住民における流入の様子を過去の資料を基にさかのぼってみた。1980(昭和55)年の調査資料から出羽島の徳島県内通婚圏を図4に表す(図4では出羽島島内出身者は省略してある)。調査対象の135人中、島内出身者が最も多く95人、島外出身者は40人であった。内訳を見ると北海道1人、大阪府2人、和歌山県1人と徳島県外からの嫁入りが少数みられる。徳島県内では、徳島市および阿南市出身者がいる以外は、全て海部郡に属する牟岐町本土・海南町・日和佐町出身者である。これらの婚姻のきっかけとしては見合いが多く、その他に少数であるが知人の紹介や恋愛結婚もみられる。彼女らは、離島そして漁業の手伝いという条件を承知した上で海を渡ったのだろう。

また前出の表1と対応して、出羽小学校編(1982)から出羽小学校卒業者の移住先を地図化してみた。図5は1982年現在の出羽小学校卒業者の徳島県内移住先を男女別で表し、図6~9はそれの10ヶ年毎の卒業生移住先を示し、同じように図10は1982年現在の出羽小学校卒業者の全国移住先を男女別で表し、図11~14はそれの10ヶ年毎の卒業生移住先を地図化した。ともにいえることは、年を追う毎に面的な広がりがあり、また比較のために男性についても調べてみると女性の方が広範囲にわたって移住していることがわかった。特に女性の関西圏移住が多いのは、かつて慣例として存在していた関西への女中奉公のなごりではないかと考えられる。また男性の移住先に三崎や清水が多数あるのは、遠洋出漁者が出稼ぎから定住へと変化したことを表しているといえる。

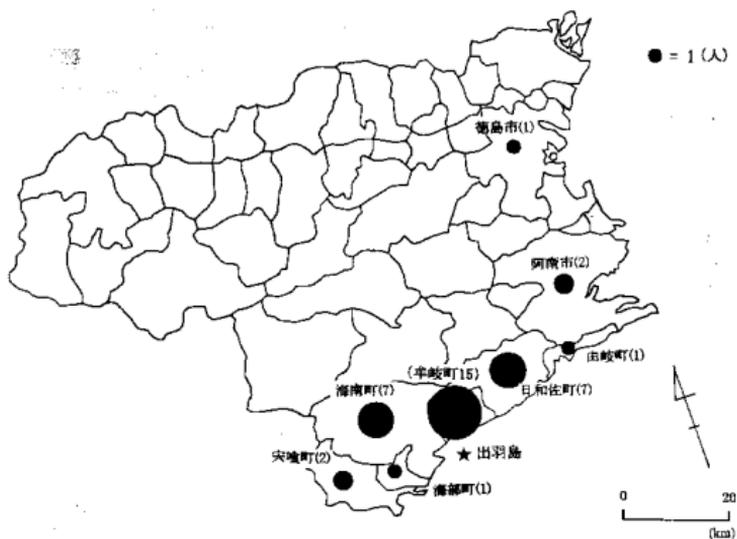


図 4 出羽島からみた 1982 年現在の女性の通婚圏

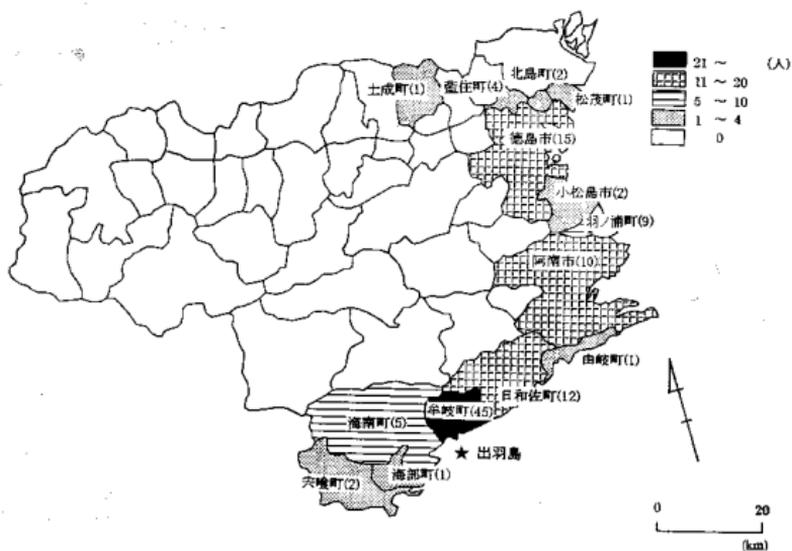


図 5-a 1982 年現在の出羽小学校卒業生移住先（徳島県内／男性）

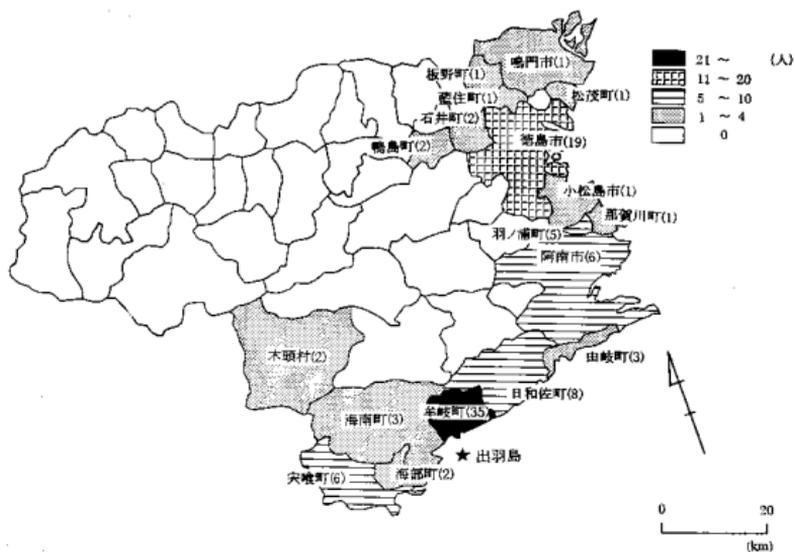


図 5-b 1982 年現在の出羽小学校卒業生移住先（徳島県内／女性）

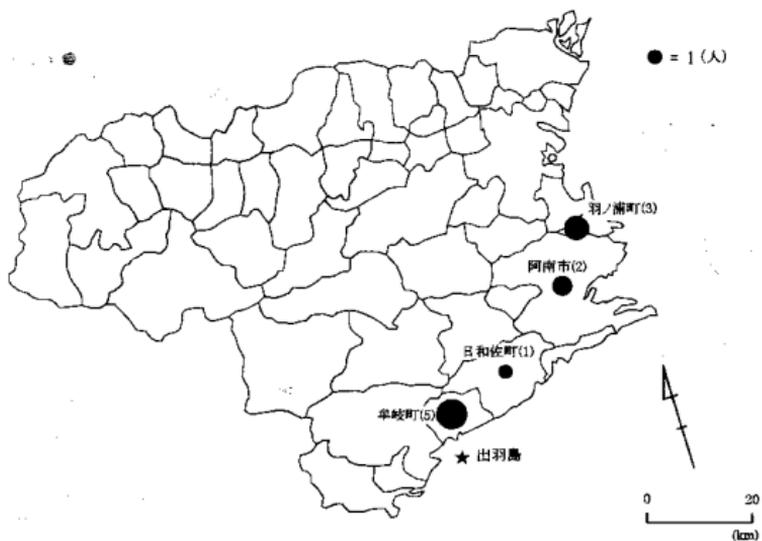


图 6-a 昭和 10 年代卒業者移住先 (徳島県内 / 男性)

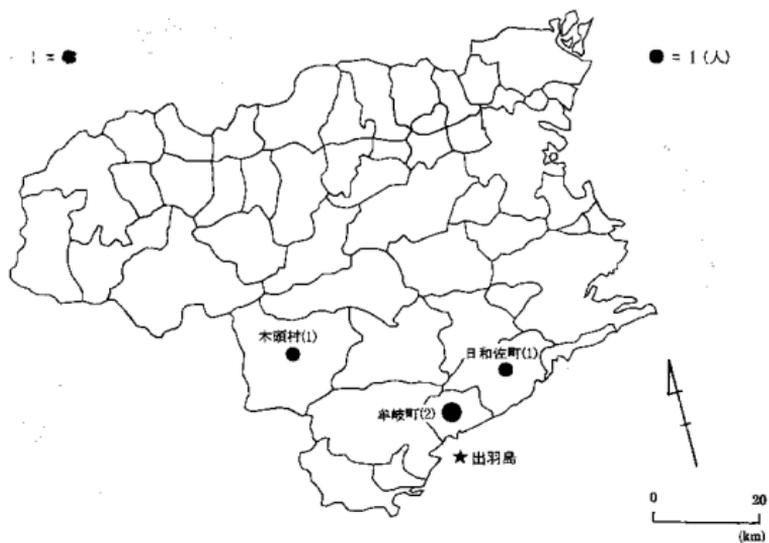


图 6-b 昭和 10 年代卒業者移住先 (徳島県内 / 女性)

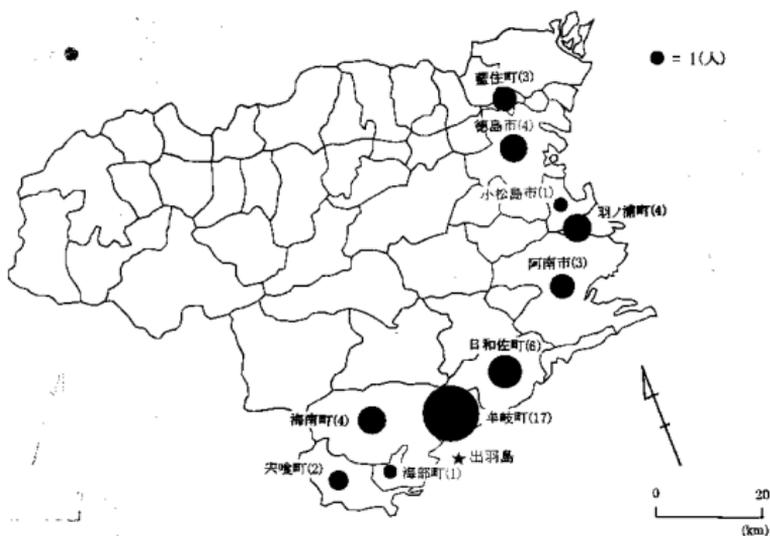


図 7-a 昭和 20 年代卒業生移住先 (徳島県内/男性)

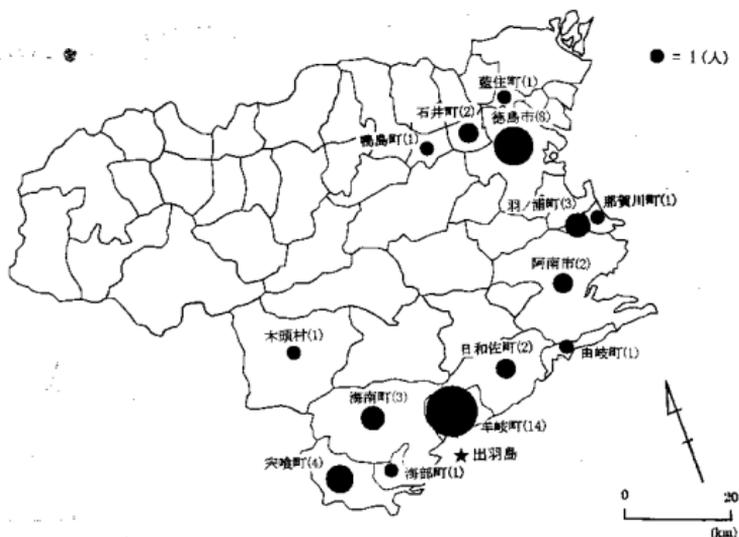


図 7-b 昭和 20 年代卒業生移住先 (徳島県内/女性)

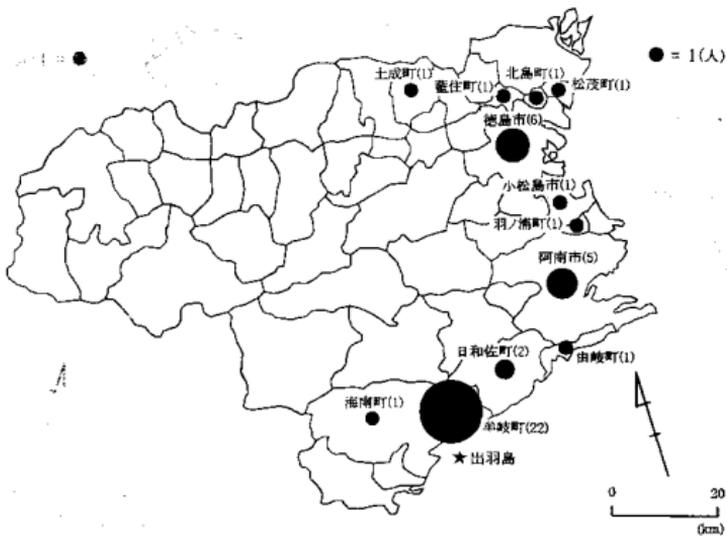


図 8-a 昭和 30 年代卒業生移住先 (徳島県内 / 男性)

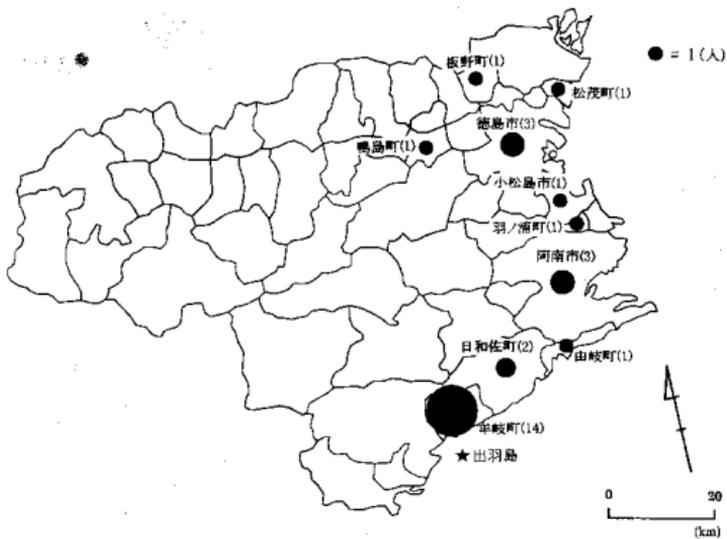


図 8-b 昭和 30 年代卒業生移住先 (徳島県内 / 女性)

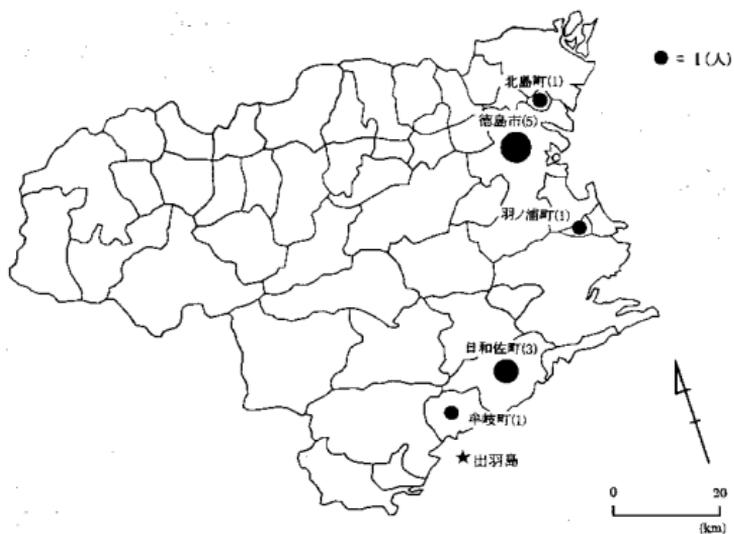


図 9-a 昭和 40 年代卒業生移住先 (徳島県内 / 男性)

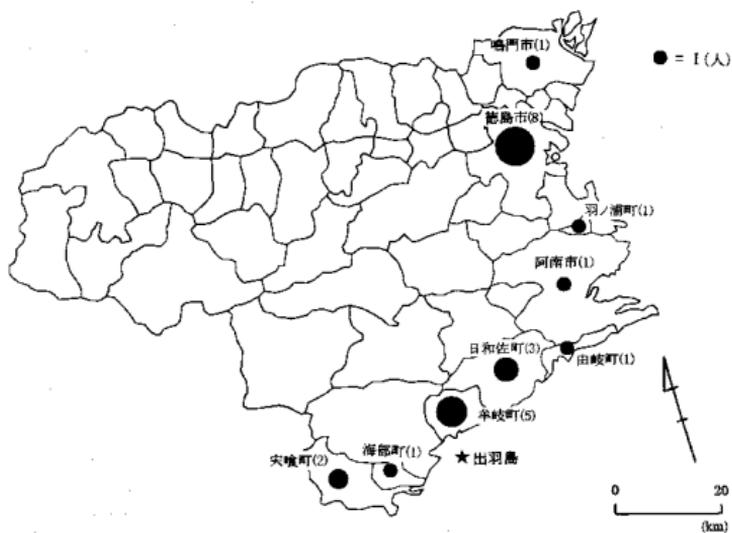


図 9-b 昭和 40 年代卒業生移住先 (徳島県内 / 女性)

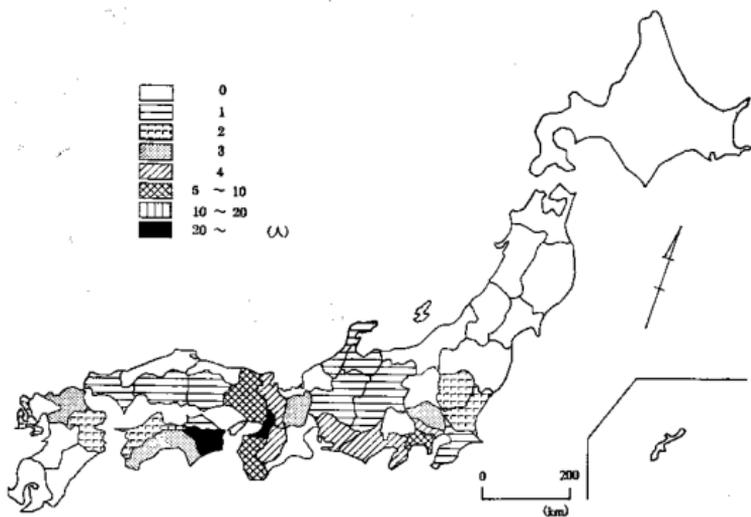


図 10 1982 年現在の出羽小学校卒業生移住先 (全国 / 総計)

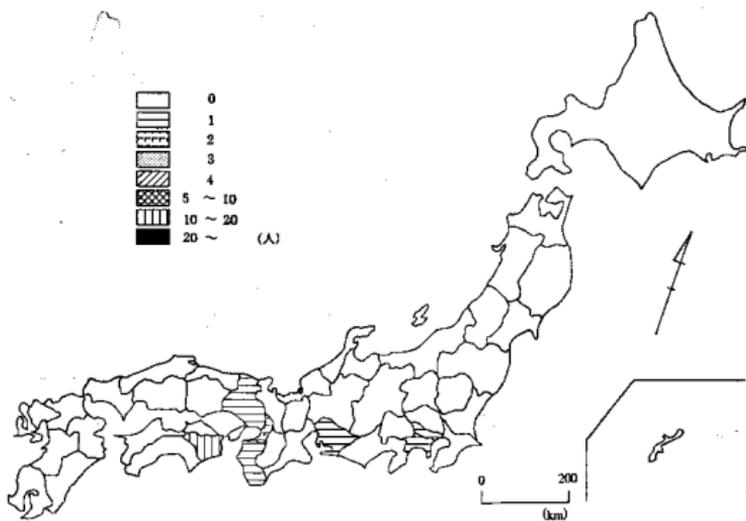


图 11-a 昭和 10 年代卒業者移住先 (全国 / 男性)



图 11-b 昭和 10 年代卒業者移住先 (全国 / 女性)

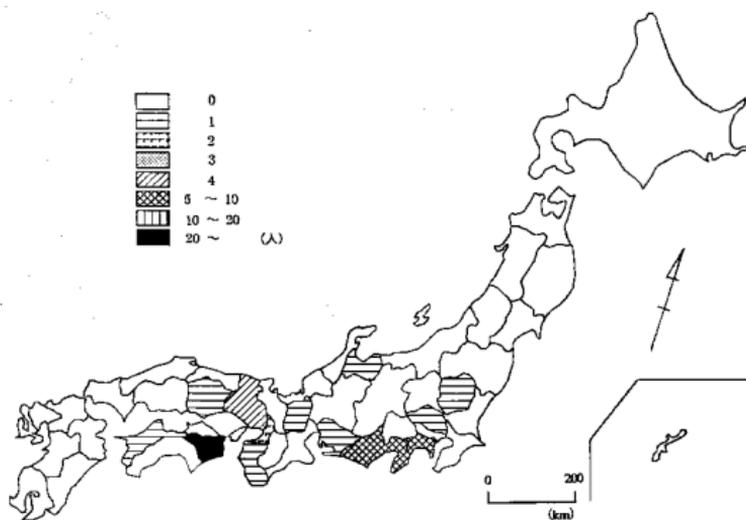


图 12-a 昭和 20 年代卒業者移住先 (全国 / 男性)

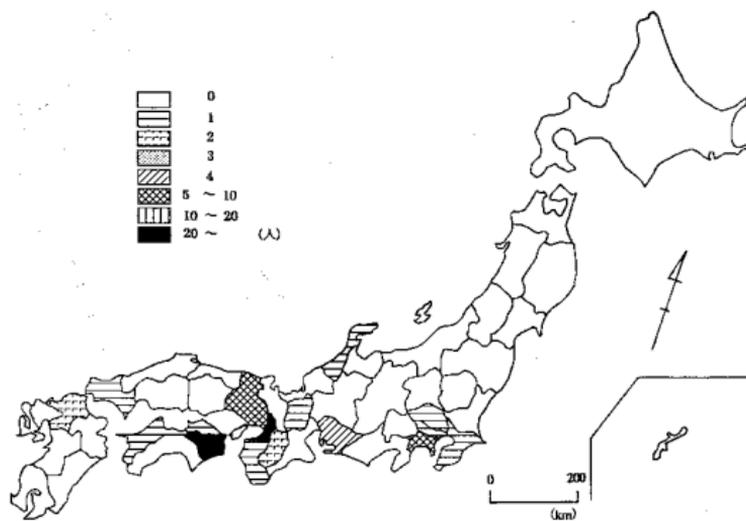


图 12-b 昭和 20 年代卒業者移住先 (全国 / 女性)

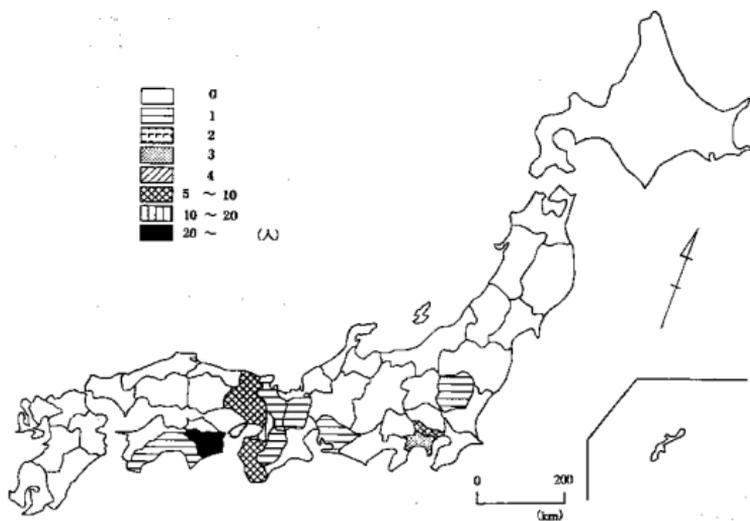


图 13-a 昭和 30 年代卒業者移住先 (全国 / 男性)

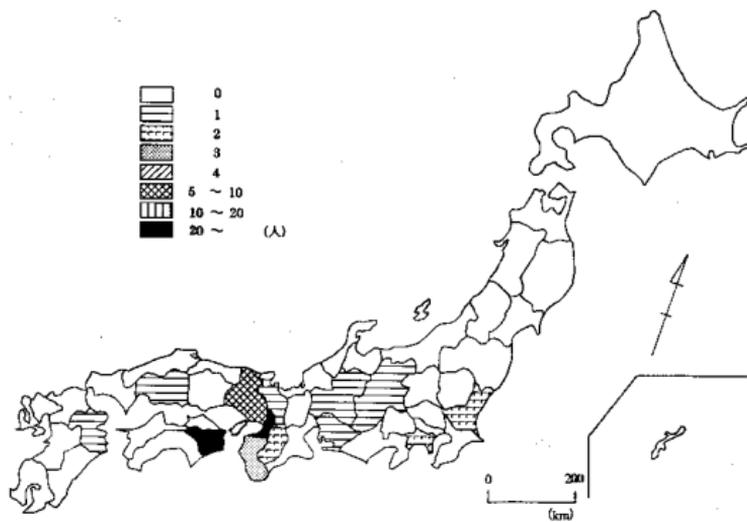


图 13-b 昭和 30 年代卒業者移住先 (全国 / 女性)

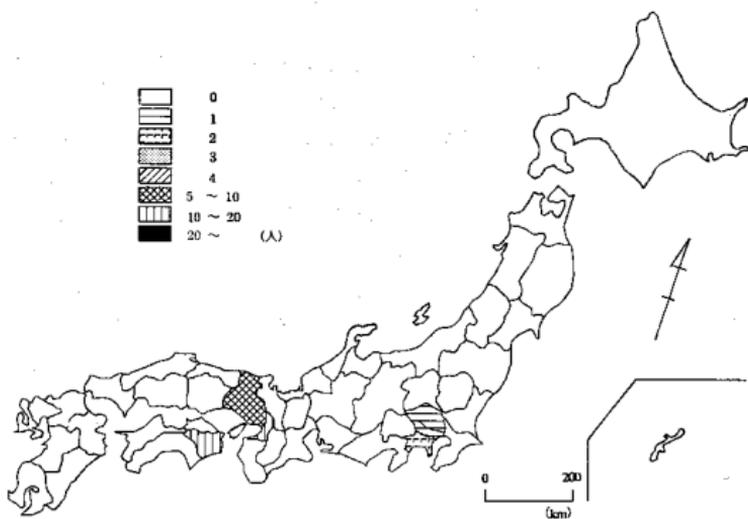


图 14-a 昭和 40 年代卒業者移住先 (全国 / 男性)

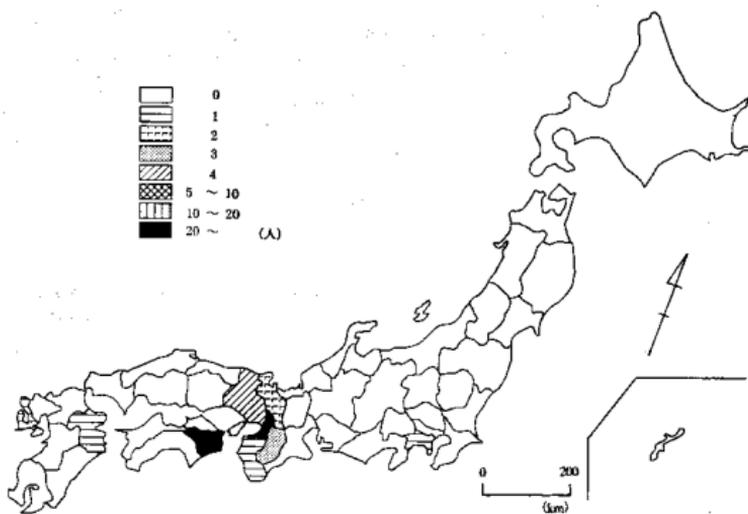


图 14-b 昭和 40 年代卒業者移住先 (全国 / 女性)

### Ⅲ 出羽島における第一次産業—海女を中心に—

#### 1) 概要

出羽島の漁業活動は、島を囲む暖流や潮の流れに恵まれていることもあって、トコブシ・アワビなどの貝類や、ハモやマダイなどの近海魚が中心である。そうした漁業に対して出羽島女性は、遠洋漁業や貨物船を引退された夫と共に漁の準備をする一方、海女として活躍されている方が11人存在する。それは女性人口113人の約1割に値する。年齢は50歳～70歳代、平均年齢にすると60.5歳となる(表3)。この高齢化は海女に限ってではなく、出羽島全体の高齢化を如実に物語っている。今後の継承者についても、子供たちが独立し出羽島以外で生活していることもあって特に考えていることはないという。海女を始めたきっかけは、自分でおもしろ半分をやっていたのがそのまま現在にいたるケースなど自分の興味本位であり、子育てが一段落ついたと思われる30歳代から始めている。海女を続けている要因には、自分の都合にあわせられること、獲物を探るのが楽しい、思いがけない大漁があるからなど、生計のためというよりはむしろ趣味的な要素があるように思われる。

表3 海女のパーソナルデータ

	生年	年齢	出身地	世帯主の職業	父親の職業	備考
A	1946	54	出羽島	出羽島漁協職員←大工←家具職人←一本釣り	漁業(沿岸、一本釣り)	海藻類・貝類採取
B	1935	65	出羽島	出羽島一本釣り←タンカー←遠洋、近海	漁業(一本釣り)	主人の手伝いで時々乗船
C	1933	67	海南町	出羽島←遠洋、三崎←出羽島	農業(7~8反)	—
D	1944	56	出羽島	出羽島←タンカー←遠洋	漁業(遠洋、タンカー)	主人の手伝い、磯物取り時々
E	1940	60	出羽島	出羽島←実習船←三崎	漁業	天草、潜り(5月~夏、月10日)
F	1944	56	海南町	出羽島←遠洋←近海←出羽島	—	—
G	1931	69	穴喰町	出羽島←タグ・ボート←遠洋	—	—
H	1924	76	出羽島	本人(海女)	漁業(一本釣り)	海藻類採取
I	1942	58	出羽島	出羽島←新日鉄←タンカー←三崎←出羽島巡航船船長	漁業(一本釣り、延縄)	—
J	1948	52	牟岐町	出羽島←遠洋←出羽島	漁業(小船←遠洋)	姑が磯物取り
K	1947	53	日和佐町	出羽島←タンカー←三崎	漁業	姑が磯物取り

海女になるためには牟岐町の海女士会に登録する必要がある。年会費は15,000円、ただし出稼ぎの人は70,000円である。海女士会の主な活動は、一つに監視である。それは海士の当番制であるが出羽島における海士は少ないのでまわってくる回数が多いと嘆く声も聞かれた。夏は昼間に1人で1・2回、冬は夜間に2人1組で3回である。他に放流と、女性を中心となった磯の掃除がある。また、解禁日を設けて漁獲資源の枯渇を防ぐようにしている。

## 2) 海女漁の方法

出漁の際はウェットスーツ・水中眼鏡・ノミ・帽子・手袋・網を身につけ、他に深く潜るために8~10kgの重りを持つ。漁獲物は、トコブシ・アワビ・赤ウニ・バイガイ・天草である。天草を採っている女性の場合、体が弱く海に潜れないため海岸で採取しているということであり、海女漁の対象としては例外だろう。出羽島の天草は良質であるので、漁協指定の袋に15kgでABCのランクはあるものの約10,000円の収入となるため高齢になっても続けられる魅力がある。出羽島の海女の種類は操業方法から大きく二つに分けることができ、ひとつは数人単位で船に乗って漁に出るものと、陸から泳いで海に出るものがある。前者を巻岐島ではフネカラアマ、後者をオカカラアマと呼ぶらしいが、出羽島では特別な言い回しはない。船を操縦するのは専ら男性であり、それが旦那さんであったり、他の男性に集まって乗船することもある。もちろん船を利用すれば活動範囲が広がり、出羽島の東方に位置する小津島・津島・大島の牟岐町区域内で、より漁獲をあげることができる(図15)。海女も個人によってその漁獲量、漁場が異なるため集団で活動を開始したとしても、自分が採取した分だけが収入となる。

## 3) 海女の活動パターン

海女漁を行うのは、トコブシ・アワビの口開けである3月15日~8月31日の10時~13時までの3時間であり、土曜日と悪天候時は休みとなる。天草の解禁は4月1日~6月30日の10時~13時とし、いずれも時期や時間規制は海女士会の資源保存規制による。

出羽島の海女漁は3時間という短時間集中なので休憩なく採取に励むことになっている。海女の労働量の多さは、漁期中の体重減少から察することができる。3月から9月までの体重減少は4~5kgあり、この原因は労働量の多さと共に逆さの潜水姿勢が関係している食欲減退からくる摂取エネルギーの低さからも生じている(尾高, 1992)。海女自身も忙しくて自然に体重が減ると語っている。

1日の活動時間や場所も潮との関係で変化していくが、おおよその活動パターンを示すと、9時に身支度を整え、船に乗るものは目的地に向かい、10時になると同時に潜水を開始する。3時間自分の力量にあわせて漁獲し、終了後はそれぞれ漁協に出荷する。自宅消費や親戚に送るというのはわずかでほとんどを漁協に出荷しているようだ。漁獲量は年々減少しているということは何度となく耳にした。出荷後、自宅に戻り、昼食・洗濯・休憩をし、日が暮れるころ晩御飯の準備をする。解禁日以外の普段時よりも早めに床に就くことがわかる。図16は海女の解禁日と解禁日以外の一日の活動を示している。Tさんの事例は、専ら陸から泳いでいける範囲を漁場とし、解禁日以外は株式会社トータスの内職に携わっている。また、Oさんの事例は旦那さんと船に乗るため漁場は大島まで及ぶ。解禁日以外はほとんど旦那さんの漁の準備や畑仕事などをされている。また大漁を願って毎日欠かさず、自宅の神棚や出羽神社に参拝されているようである。

#### 4) 小括

出羽島における海女漁は生計のためというよりむしろ、趣味的な要素が多いということは特筆すべきことであろう。それは島全体の高齢化が示すように、子供が各々独立し、後に残された自分達の生活費だけにあてればよいということかもしれない。自分達の労働の特殊性にこだわることなく、変わりゆく状況にさらりと身を投げ出しているともいえる。

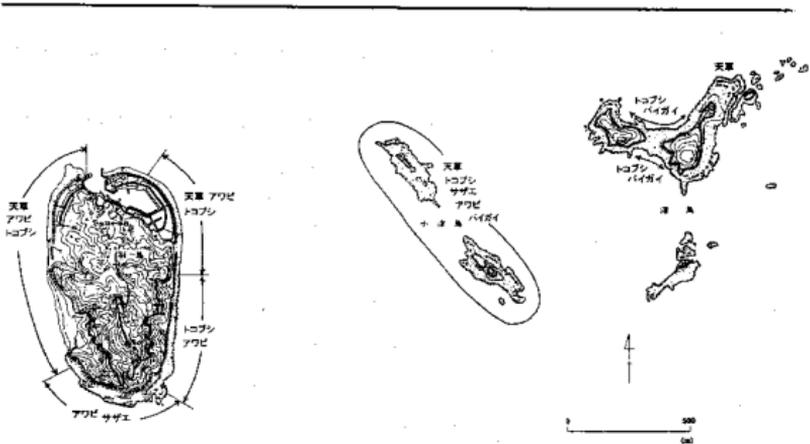
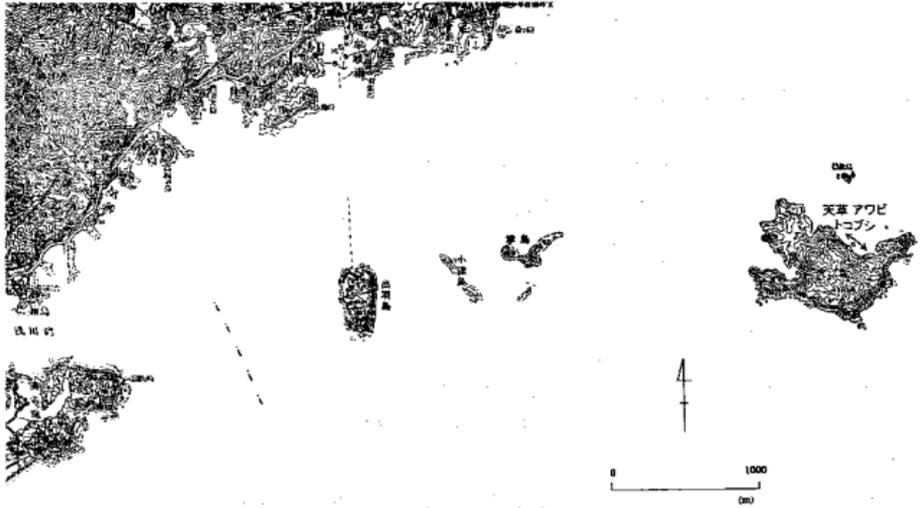
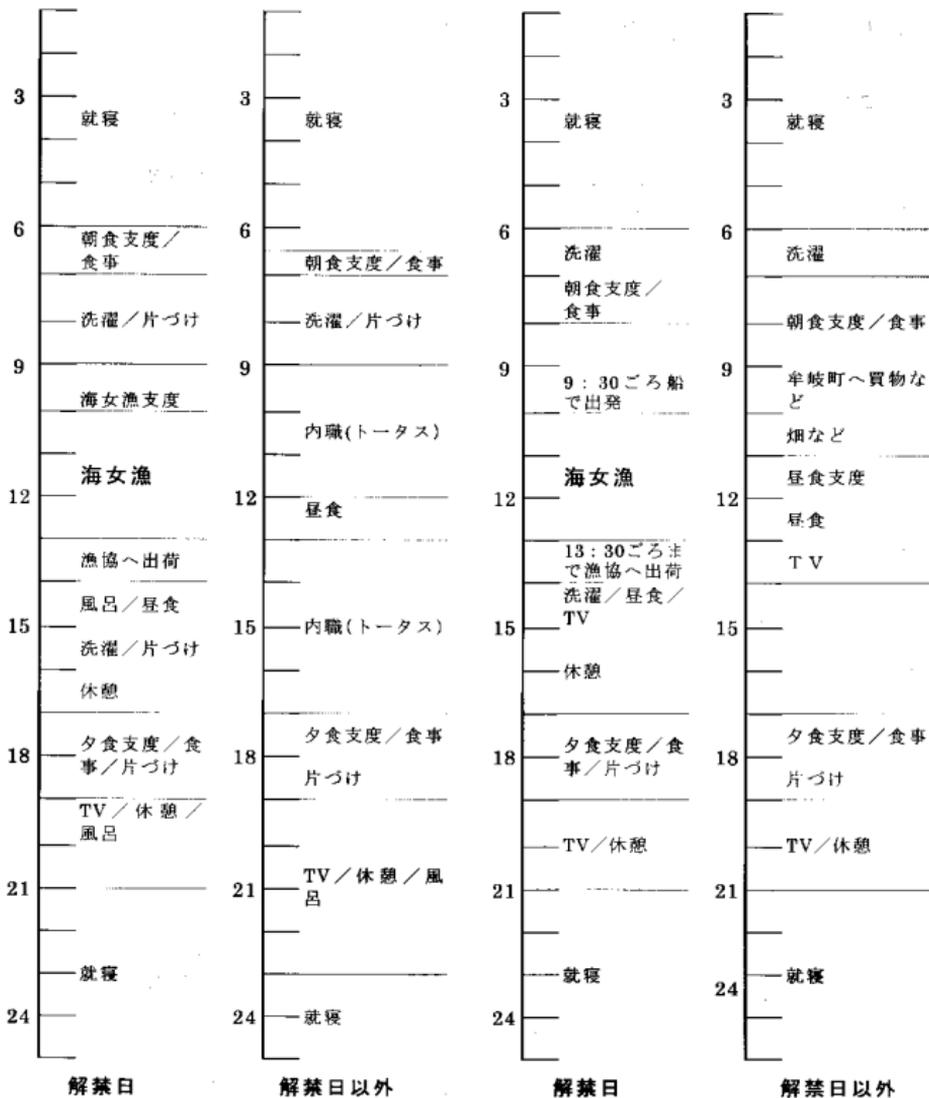


図 15 海女漁の魚場



Tさんの事例

Oさんの事例

図 16 海女のタイムスケジュール

#### IV 出羽島における第二次産業－繊維工場を中心に－

##### 1) 昭和 40 年代

###### (a) 上野商店について (写真 1)

1969 (昭和 44) 年 9 月設立, 1991 (平成 3) 年の撤退まで 21 年間操業した。現在の水揚げ場の 2 階に位置していた。それまで女性の余剰労働力は海草採取に投下されていたが, 昭和 35~36 年から固定就労への欲求が高まりをみせ, 昭和 40 年代に入り漁協婦人部の企業誘致運動が活発化した。牟岐町での婦女子層への雇用機会の創出は必然的に出羽島にも波及することとなった。上野商店の経営者である兄は大阪で, 弟が牟岐町で事業を展開させた。

仕事の内容はセーター機械編みという労力を要するものであったため, 当時島内の就労希望者は 60 余人あったが 15 人という四分の一を満たすにとどまった。そこで働く女性は 25~40 歳で, 子供が保育所 (1958 年開設, 5~8 歳の児童を対象としていた)。1989 年に廃所となり, 翌年 1990 年に現在の診療所として新築された) や学校に通っている間の暇を見つけての就労であった。時間規則はなく, 自分の都合にあわせられ, 仕上がった分の能力給であった。

1991 (平成 3) 年の撤退理由には, その機械編みは立ち仕事であったため, 女性の高齢化にともない体力的な負担となり, 上野工場側が継続を求めたにもかかわらず, 全員一致で閉鎖を申請することになった。



写真 1 操業中の上野商店 (1980 年)

(b) 浅野商店について (写真2)

(写真2) 一スモ一イ社会及制一製平 (2)

1972 (昭和 47) 年から 1981 (昭和 56) 年の 9 年間、旧診療所脇のプレハブ内で行われていた。上野商店の 3 年後の進出であり、6 人の労働力を生み出した。翌年には 13 人になり、30~60 歳代の女性を雇用した。ブレザーや制服の上着、ブラウスなどの縫製が主であった。若い方はミシンを、年配の方はアイロンやしんはりなど体力的な分担が行われていた。

浅野商店の進出要因は、社長夫人が出羽島出身者であったことによる。故郷に錦を飾るというか、女性の余剰労働力を察しての配慮といえる。秋には毎年 2 泊 3 日の旅行を社長の自腹で行い、大山・後楽園・永平寺・富士山など各地に連れていったそうである。浅野商店から派遣された住み込みの責任者が撮影したその旅行ビデオを上映してくれたり、福利厚生が充実していたようだ。しかし、浅野商店の撤退理由にも、高齢化による労働者の確保が困難になったことがあげられた。

製工業界のスモ一イ(制) ト巻

製工	製工業界
1981	てま社製紙・製イマで等

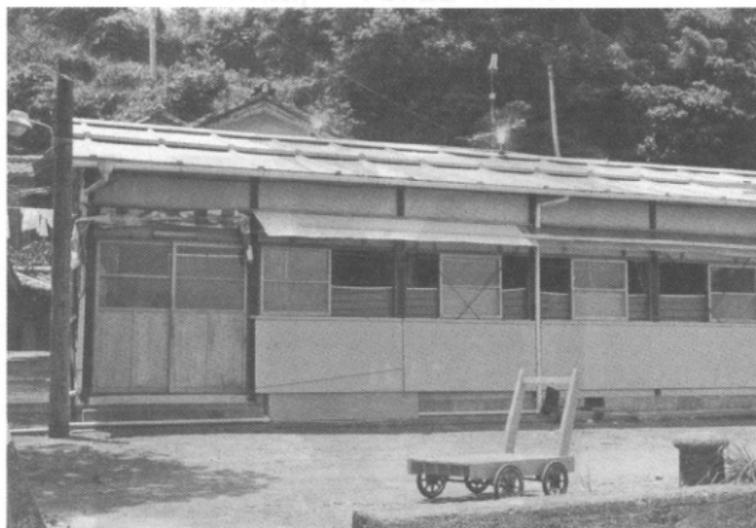


写真2 操業中の浅野商店 (1980年)

(平 8281) 製工業界スモ一イ(制) 写真

## 2) 平成一株式会社トータスー (写真 3)

(写真) フジテレビ系番組「お

1991 (平成 3) 年ごろに株式会社トータスが進出し現在に至っている。場所は個人的に日和佐の内職 (パンツなどの縫製) をしていた空き家に業務用ミシンを 3 台設置して行っている。きっかけはトータス側の提示した 4 人 1 組のグループがそろえば進出するという条件を満たすことであった。3 人は集まったものの、あと 1 人上野商店を引退した H さんに声がかかった。それから 4 人はトータスの所在地である海南町に 1 週間の見習いに出かけた。

トータスの下請けしているところは、丸松・ライオン・ファミリア・ヘンリー・ケティ・ミキハウス・第一紡績・ヤマトインターナショナル・ニッコーウェア・日商岩井・日商丸大・mont-bell などがある。

例として、ライオンのポロシャツの作業工賃を示す (表 4)。その工賃はトータスが決定を下している。目標は 1 ヶ月 200 枚の仕上がりとされている。納期は火曜日・木曜日・土曜日に出羽島発 9 時の連絡船に積み込み、牟岐町発 11 時の連絡船に次の仕事が持ち込まれる。就労形態としては、上野商店や浅野商店のパートタイムと異なり、内職である。収入は毎月 5 日払い、現金で渡される。バブル期は 12~13 万円であったのに対し、現在は不況の波が押し寄せ 5% カットされた。労働時間は週 6 日であるが各自に任されており、日曜日は休みとなっている。

表 4 (株)トータスの作業工賃

作業工程	工賃
ポケット付・袖縫付まで	190円
ポケットなし・袖縫付まで	170円
ポケット付・襟縫付まで	120円
ポケットなし・襟縫付まで	100円

注)筆者の聞き取りより作成



写真 3 (株)トータス作業場 (1999 年)

### 3) 小括

第2次産業の出羽島進出について、上野商店・浅野商店そして現在に至るトータスの進出背景と作業内容、撤退理由を列記した。3つの繊維工場に共通していることは、あくまで女性の余剰労働力を活用するということである。それらは一様に決して高収入を望めるものではない。低賃金の理由として考えられるのは、企業が零細であることや、島内だけでなく牟岐町内にも競争相手となる工場が少ないことなどがあげられるが、その他の理由として、作業中でも自家の船が帰港すれば直ちに作業を中止して、水揚げの手伝いに駆けつけられる、用事があればいつでも気兼ねなく休める、また子供を職場に連れて行けるなど、大企業のような就業規則がないためである。そのために雇われる側もその自由さを条件として低賃金に甘んじているというのが現状である。

また浅野商店の聞き取りの中に、そうした漁業以外の仕事を経験すること自体が生活のメリハリになっていたということ、社員旅行で他の地域を知ることができたということ、自分の労務の結果が給料という目に見える形で表れることが、彼女たちの人生をより豊かにするエッセンスでもあったということも付け加えておかなければなるまい。

## V その他の女性労働

この章では聞き取った数が少ないため一般化はできないが、個人の労働を簡単に説明していく。

### 1) 出羽島以外の就労

牟岐町出身の T さん（70代）は親類の紹介で出羽島に嫁いだ。その当時は電気や水道が完備されていなかった（電気導入完成は1967年、水道管敷設送水は1973年）ため、家事・風呂のための水汲みや尿尿運び、そして漁の手伝いさえも初めてとあって、大変なご苦労をされたようであった。

子供が中学進学したのを機に1965（昭和40）年から20年間牟岐の敷物工場に勤務した。牟岐にある中学校に通う子供と一緒に通勤し、帰宅する日々を送っていた。上野商店が進出したのは1969（昭和44）年であったため就労機会を牟岐町に求めたのは当然のことであろう。収入は出来高制であり、労働時間は週6日、日・祝日が休日であった。また夏休みをとり延縄の手伝いや畑仕事にも携わっていた。

### 2) その他の就労

古牟岐出身の O さん（60代）は母親の里出羽島に嫁いだ。旦那さんは遠洋漁業で三崎や清水に出稼ぎしていたが結婚1年後出羽島で漁を始めた。筆者が島を散策していた期間も常に一緒のおしどり夫婦であった。Oさんの一日は午前3時30分夜明けを待たずに出漁し9時に帰港、9時30分の漁協出荷準備には今朝の獲れたての魚たちがおめ

みえする運びとなっている。あとは日が暮れるまで明日の漁の準備であるオキアミを釣り針にさす作業が延々と繰り返される（写真4）。お手製の釣り針をさす箱には90針させるようになっていて早い人で1箱2時間かかる作業だと耳にした。ならば9箱もあるOさんのところでは単純計算で18時間かかることになる。それならば奥さんの手伝いは欠かせない。そして引退された親戚のおじさんまでも手伝いに加わっているということだった。漁業というものは釣ることだけが仕事であると認識していた筆者は漁の準備こそが手間がかかり、最も重要な仕事であると認識できた。

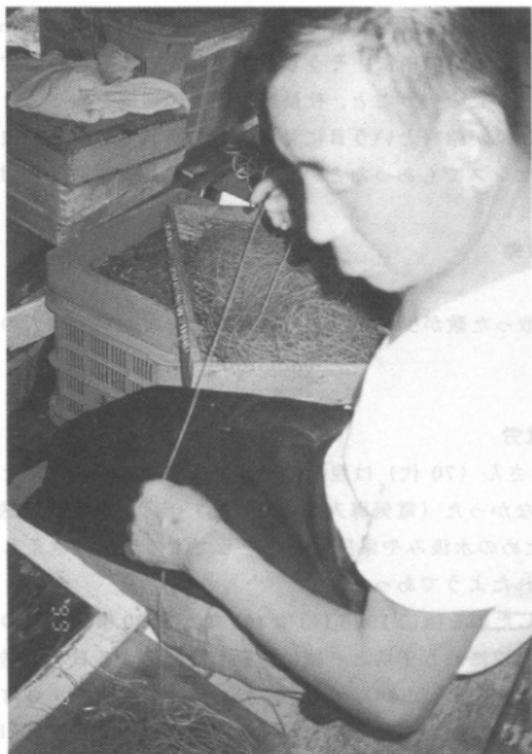


写真4 延縄漁の準備

## VI おわりに

漁業における女性の役割は、漁業労働の中に大きな足跡を残しながらも、魚は男子が獲るものという一般的な認識のため見過されがちであった。筆者自身もそのような概念を持っていたが、今回、女性をキーワードに出羽島を見てみると、女性労働の必要性は極めて大きいことを改めて認識できた。

また、通婚圏や島民の移住先を図化することによって、島外への流出は、居住人口が島の生産力に追いつかないための調節弁的な役割であったということを察することができた。こうした激しい人口移動の裏には、この島に住む人々の海洋民族的な性格も大きく作用していたのではなかろうか。島民にとって海とは、人と人を隔てる恐ろしい境界ではなく、むしろ人と人とを結び付けるかけがえのない領域であった。そしてまた、島を後にした者をいつでも快く迎え入れるこの島の風土が、島外へ渡った者の精神的な支えになっているのだろう。

図 17 は出羽島の海女 11 人と株式会社トータス従業員 4 人の分布を示すと同時に、上野商店、浅野商店、トータスの所在地を示している。特徴としては海女の分布が州鼻地区に多くみられることが挙げられる。

最後に、海女であれ内職であれ、自分たちの労働の特殊性にこだわらない女性たち、海を越えて離島に嫁いだ女性たち、かつての遠洋漁業の男性を支えた女性たちの力強さは筆者の想像以上のものであった。

家のことはもちろん田畑のことや山のこと、海のこと、それに対応した女性たちの活動が出羽島にはあった。

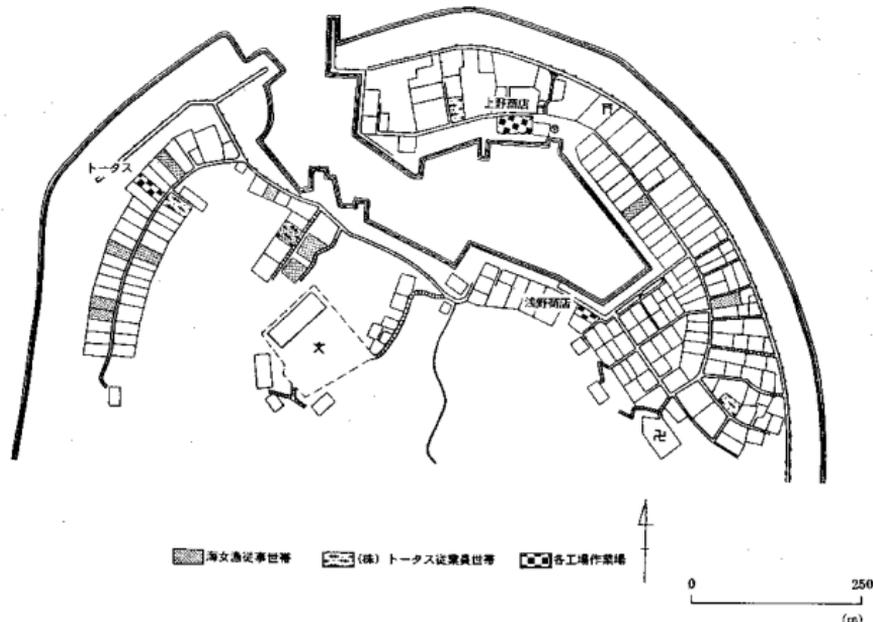


図 17 海女世帯およびトーラス従業者世帯分布

〔付記〕「幼は老をうやまい、老は幼をはぐくみ、社は幼老双方をいつくしむ」、この言葉の出典は不明ですが出羽島を語るにふさわしいと思います。出羽島には3人の小学生がいて、やんちゃな彼・彼女らを島民はみな孫のようにかわいがり、また、漁を引退された方が現役の漁師に仕掛けを伝授されていたのを目の当たりにしたからです。

また出羽島を取り囲む海原がそうさせているのでしょうか、漁をされている方はみなさん寛大なようです。初日に「よそもんやね」と言われて、落ち込んだのもつかの間、最終日には長老（井村善太郎さん 92歳）がお見送りしてくれるほどすっかり打ち解けてしまいました。井村さんは最近胆石（漁村には多いようです）を除去する手術の麻酔でちょっと物忘れしやすくなったと奥さんがおっしゃっていたので、私が帰るといふことなど忘れてしまうのではないかと思っていただけに、見送りにいらしてくれて、本当にうれしかったです。井村さんは、自宅の縁側で双眼鏡を片手に島内を観察する（のぞき）のが日課とおっしゃっていました。足腰も丈夫でとても明治生まれには見えません。そして田中節子さんに紹介していただいた原田素子さんにトーラスで体験学習させてもらいました。業務用ミシンは触れるのも初めてで緊張しながらも小袋を作らせてもらいました。

延縄の準備をされている奥村さん夫婦の所でもずいぶん長居させてもらいました。娘さんは阿南に嫁いで、息子さんは大生丸の船長をされています。横顔が似ています。いつ訪ねても二人で作業されていておしどり夫婦でした。おそらく出羽島の離婚率は0%ではないでしょうか。奥村さんに夫婦ゲンカについて尋ねると、けんかしている暇が無いほど忙しいとの答えでした。ある意味、のろけかもしれません。

島の漁港を見渡せるフェンスの所にいつも二人で立ち話しているおじいさんがいました。堤武夫さんともう一人は名前を聞き忘れしました。こうして日がな一日立ち話をしているような人はみ

んな年金生活者のようです。たまには遊びで漁に出るようですがほとんど島の観察です。私も一緒に島を見渡したり、思い出したように会話をしたり。時がゆったりと流れていくのを感じました。

島の夜は早くやってきます。21時過ぎにはTVの音が聞こえるものの明かりが消えています。海際はライトがあたらないので星を見るには最高でした。漁港の方に足を運んでみると釣りをされているおばさんが2人。釣り具をお借りして私も釣りをさせてもらいました。最初は手応えが無かったもののおばさんにコツを伝授してもらおうとママアジが釣れる釣れる。前夜の方がよく釣れたそうですが私は充分満喫しました。おばさんは釣った魚は近所に配るなど遊びでされています。

アジは翌朝おばさんにさばいてもらって、山野先生の調理により格別の味わいでした。またその日の晚餐は豪華でした。田中節子さんに調理していただいた、ハマチの刺し身、太刀魚の塩焼き、野菜天ぷら、レンコダイのから揚げ、タイのお頭の煮付け、鳴門のワカメなど、どれも言葉を失うものばかり。本当に美味なるものに美辞麗句は不要なのです。

5日間という超短期滞在、初対面にもかかわらず出羽島の皆さんは暖かく迎えてくださって感謝してもしきれないほどです。必ず今度はプライベートで訪れたいと思います。長老の様子も気になりますし。正直言って準備中は気乗りしなかったのですが、やはりフィールドワークは現地へ赴く、その行為そのものに大きな意味があると確信しました。牟岐町史、出羽島の地図を眺めているだけではなんの興味も湧かないのです。しかし、島民と話をしたり観察をしてはじめて出羽島の全体像が見えてくるのでした。今回の出羽島調査は私にまた一つ新しい世界を教えてくださいました。

最後に土壇場アンケートにお答えくださった田中節子さん、奥村千寿代さん、麦藁帽子をかしてくれた奥村重隆さん・佐洋子さん夫妻、とっぴっきりやさしかった原田素子さん、のぞきの約束を誓った井村善太郎さん、私を受け入れてくださった出羽島の皆さん、本当にありがとうございました。

## 参考文献

- 岩崎繁野 (1977) : 漁業における婦人労働, 西日本漁業経済学会編『経済発展と水産業』西日本漁業経済会, pp.450~461.
- 大喜多甫文 (1973) : 志麻地方における海女漁村の生産形態. 人文地理, vol.25, pp.68~101.
- 尾高奈都子 (1992) : 海女のちから. 体育の科学, vol.42 [9月号] pp.703~707.
- 佐野眞一 (2000) : 『NHK人間講座 宮本常一が見た日本』日本放送出版協会, 207p.
- 出羽小学校編 (1982) : 『出羽小学校百年史』出羽小学校
- 徳島県海部郡教育研究所編 (1966) : 出羽島・大島・津島の調査研究 研究紀要第14号一, 徳島県海部郡教育研究所, pp.1~40.
- 土井仙吉 (1985) : 徳島県南部の遠洋出漁漁村, 土井仙吉教授退官記念論文集刊行委員会編, 『漁港の立地と変動 土井仙吉地理学論集一』光文館, pp.94~110.
- 西木秀治編 (1977) : 『徳島の内職』徳島県内職友の会, 129p.
- 姫田忠義 (1981) : 島の女と文化. しま, no.104, pp.15~23.
- 松木由美子 (1988) : 小呂島のあま(海女)漁業, 九州大学文学部地理学研究室編『玄界灘の離島漁業 小呂島・姫島の分析一』九州大学文学部地理学研究室, 61p.
- 牟岐町史編集委員会編 (1976) : 『牟岐町史』牟岐町, 1383p.